

前書き



明治からはじまる近代は、時代の画期であるとともに、日本語にとっても大きな変化の時代でした。前代までの文化と伝統の蓄積を担いながら、同時に新しい時代の文物や心性を表現することは求められ、模索されました。

漱石や鷗外、紅葉・四迷・露伴・鏡花などのいわゆる文豪たちは、この時代の要請を背負いつつ、ことばによる表現に全身全霊取り組みました。その作品を読むとき、テーマと内容の深さに打たれるのはもちろんのことながら、そこで使われることばの数々の彩りにも興味を引かれていることに気づかされます。漢籍などの大量の漢語の知識を背景に、多くの見慣れない語が次々に現れる一方、見知った語でありながら今とは違った意味用法であるものなど、それらの多彩なことばの世界に自ずと魅了されているのではないのでしょうか。

本書は、文豪たちの手で紡がれたことばの一端を、『大辞林第四版』の語義と用例から抽出し、ご紹介するものです。文豪たちの作品に埋め込まれた豊かで実り多い豊饒なることばの世界をお楽しみいただければ幸いです。

二〇二三年六月 三省堂編修所

この辞典に収録したことば

『大辞林第四版』の収録語で主に近代の作家の用例があるもののうち約一四〇〇語を選んで掲載しました。一部、新たに用例を加えたものもあります。

この辞典の見方

- 仮名見出し、表記、語義解説、用例は『大辞林第四版』に準じています。
- 語義解説の複数ある語(多義語)については、作家用例のある語義のみ掲出しました。
- 〔用例中の「―」は見出し語を示しています。活用する語は「―」の後に中点(・)で区切って活用語尾を示しました。〕
- 用例の末尾には作家名と作品名を掲出しています。
- その語が季語の場合は、語義の末尾に(季)の口ゴを置き、季節を示しました。
- 漢字は、常用漢字表(平成二年一月三日内閣告示)および表外漢字字体表(平成二年二月八日国語審議会中)に掲げられた字体を使用しています。例えば、前者では「龍」「雷」ではなく「竜」「雷」、後者では「鷗」「屏」ではなく「鷗」「屏」となります。

文豪たちには選ばれた、豊かで奥深い「ことば」の数々をぜひお楽しみください。

ジャンル分類

● 以下の七ジャンルを設け、それぞれに関連する語を分類しました。

情景	山川草木など自然にかかわるものを描写・形容する語
人事・事物	人の属性やいろいろな事物を指す語
動植物	動物・植物にかかわる語
情感	喜怒哀楽など人の感性・感情にかかわる語
活動	動作・行動にかかわる語
様態・様子	人や物の性質・ありさま・様子などをあらわす語
論理・抽象	単位や数量、時間、人称、文法機能などの抽象的概念をあらわす語

索引

● 巻末に五十音順の索引を置きました。ジャンル分類をまたいで語を検索する際にお使いいただけます。

情景

自然にかかわる描写・形容など

あいたい【緩鍵】 雲のたなびくさま。また、雲の厚いさま。

〔紫の雲——と柵引き〔坪内逍遙〕細君〕

あおだたみ【青畳】 おだやかな青々とした海面などをたとえていう語。

〔海を——にして二人で半日〔泉鏡花〕歌行灯〕

あさすず【朝涼】 夏、朝のうちの涼しいとき。

〔夏

〕——はいっしか過ぎて日かげの熱くなるに〔樋口一葉〕たけくらべ〕

〔明日——に行つたが好いちやあないか〔幸田露伴〕自縄自縛〕

あぶらでり【油照り】 薄曇りで風がなく、じりじりと蒸し暑い夏の天候。〔夏

〕日が——に照りつけて〔谷崎潤一郎〕青

春物語〕

いこう【委巷】 曲折した路地。むさくるしいちまた。

〔明道の執見僻説、——の曲士の若し〔幸田露伴〕運命〕

いす【夷す】 平らになる。また、平らにする。

〔此山の——して平原に下る所は〔徳富蘆花〕順礼紀行〕

いっつい【汨汨】 水が速く流れるさま。

〔利根の川水日夜に流れて滔々——〔幸田露伴〕平将門〕

いんいん【隠隠】 音のとどろくさま。

〔雷——として鳴り初めぬ〔徳富蘆花〕自然と人生〕

いんいん【殷殷】 音のとどろくさま。

〔——として雷の響〔泉鏡花〕高野聖〕

いんう【淫雨】 長く降り続く雨。長雨。霖雨。
うら。

〔晴る〔永井荷風〕断腸亭日乗〕

いんうん【氤氳】 天地の気が盛んなさま。

〔たる暝気ぬきが散るともなしに四肢五体に纏綿して〔夏目漱石〕草枕〕

〔天地の——交错して万象おのづから生ずるを〔幸田露伴〕評釈曠野〕

いんしん【陰森】

〔樹木が茂り日をさえぎって暗いさま。〕

〔——として日の光さへ薄く〔内田魯庵〕くれの廿八日〕

〔うすぐらく、静かでものさびしいさま。〕

〔部屋は——として物凄く〔内田魯庵〕罪と罰〕

うい【雨意】 雨が降りそうなようす。雨模様。

雨気。

〔陰晴定らず——天に満つ〔永井荷風〕断腸亭日乗〕

うつつお【鬱翁】 草木が盛んに生い茂るさま。

〔たる森林の、影いと暗き隙間を〔坪内逍遙〕慨世土伝〕

うっそう【鬱蒼・鬱葱】 草や木がこんもりと茂るさま。

〔油蟬の声は御殿の池をめぐる——たる木立ちの方から沁み入るやうに聞えてみた〔有島武郎〕或る女〕

うなづら【海面】 海の表面。かいいん。

〔藍なす——を見わたしながら〔幸田露伴〕雪紛々〕

うんえんひどう【雲煙飛動】 雲や煙が目
の前を過ぎてゆくさま。自然の風物。

〔 〕の趣も眼に入らぬ〔夏目漱石「草枕」〕
 うんとう【雲濤】 水平線に打ち重なって見え
 る雲と波浪。

〔 〕大洋のまことに涯無き——のさま〔幸
 田露伴「うつしゑ日記」〕

うんべいせん【雲平線】 「〔うんびょうせん〕
 とも」高度の高い場所から、空と雲との境界と
 して水平線のように眺望できる線。

〔 〕雲の海のはてはだんだん平らになる
 それは一つの——をつくるのだ〔宮沢
 賢治「東岩手火山」〕

えいしよく【盈昃】 満ちること欠けるこ
 と。

〔 〕潮や節や月の——や〔幸田露伴「努力論」〕
 えんえん【涇涇】 水よどみなく流れるさま。

〔 〕流水の——たるは惆悵ちゆうじやうの響をなす

〔 〕檜樹ひのき——たるの下に〔志賀重昂「日本

風景論〈

おうも【莨茂】 草木が盛んに生い茂ること。

〔 〕此時に際して樹木——して〔幸田露伴「一
 国の首都」〕

おうよう【汪洋】 (海や河などの)水量が豊富
 で、広々としているさま。ゆったりとして広大
 なさま。

〔 〕——として光つてゐる大河へ〔二葉亭
 四迷「片恋」〕

〔 〕——たる詞海、海想海の何処に漂ふとも
 〔徳富蘆花「思出の記」〕

がいがい【皚皚】 霜・雪の一面に白く見える
 さま。

〔 〕白雪——として山頂を被ふ〔志賀重昂「日
 本風景論」〕

〔 〕東海散士「佳人之奇遇」

えんえん【蜿蜓】 ヘビなどがうねり行くさま。
 また、うねうねと長く続くさま。

〔 〕愛宕の山脈が——と連なつて〔谷崎潤
 一郎「朱雀日記」〕

えんけん【偃蹇】 高くそびえるさま。

〔 〕——として潤底に嘯く松が枝〔夏目漱
 石「薙露行」〕

おううつ【莨鬱】 草や木が盛んに茂っている
 さま。

〔 〕左右は——たるマホガニイの大森林
 で〔内田魯庵「くれの廿八日」〕

おうおう【泱泱】 水面が広々としているさま。

〔 〕——たる河水の、…流れ流れ流れて〔徳
 富蘆花「自然と人生」〕

おうぜん【莨然】 草木が盛んに生い茂るさま。

〔 〕——たる雪の下に〔泉鏡花「冠弥左衛門」〕

かいかつ【開豁】 眺めが広々と開けているさ
 ま。

〔 〕——なる広野の外に〔田口卯吉「日本開
 化小史」〕

かいけい【海景】 海の景色・風景。

〔 〕冬のさびしい——が泣いて居るでは
 ないか〔萩原朔太郎「まどろすの歌」〕

かいかう【海光】 海面が日光に照りかがやく
 こと。

〔 〕空気に乾燥、天色——転た朗かに〔志
 賀重昂「日本風景論」〕

がいかう【外光】 戸外の太陽光線。外光線。
 〔 〕五月のきんいろの——のなかで〔宮沢
 賢治「小岩井農場」〕

かいいい【晦冥】 くらいこと。くらやみにな



ること。まっくらやみ。

〔深黒こくろ〕——にして、その奇景の一端を窺うかが見みること能はず〔田山花袋「日光

山の奥おく〕

かいうう【晦濛】雲などがたちこめてできる暗くらがり。

〔彼の心は頭上の空より、更に——の底へ沈しずんでゐた〔芥川竜之介「素戔嗚尊」〕

がが【峨峨】山などの険しくそびえ立つさま。

〔山脈〕——として相ひ連なり〔矢野竜溪「浮城物語」〕

かくえき【赫奕】

①光り輝くさま。かくやく。

〔錦の御帯金色〕——たりしとかや〔幸田露伴「風流仏」〕

〔銀色〕——として鯉あり〔泉鏡花「起誓文」〕

書屋俳話

がんけい【岩頸】〔火山岩頸〕の略 火山体が浸食されて、火道を満たしていた溶岩などが塔状に露出して残った岩体。岩栓がんせん。

〔山はぼんやり〕——だつて岩鐘がんしょうのゆめをみてるのだ〔宮沢賢治「雲の信号」〕

かんじやく【閑寂】もの静かなさま。静かであるさま。かんせき。

〔この——な室内の光線はうす紅く〔萩原朔太郎「薄暮の部屋」〕

かななぎ【寒風】寒中の、風がなく波がおだやかな日和ひより。冬風。●冬

〔——の帆を下ろし帆柱〔尾崎放哉〕

〔近南に別山〕——として峭立せうりつし〔志賀

②物事の盛んな・こと(さま)。

〔王威〕——の極に達し〔福沢諭吉「文明論之概略」〕

かくしやく【赫灼】光り輝くさま。

〔光明〕——として輝く〔樋口一葉「うもれ木」〕

かげつ【花月】自然の景物。また、風流ふうりゅうと。

〔目前の——の天地を樂しげに打看るのみの様子なるに〔幸田露伴「風流微塵蔵」〕

かげつ【夏月】夏の月。夏の季節。

〔——花ありといふ時節も丁度今なんだけれども〔泉鏡花「黒百合」〕

かつぜん【豁然】ぱつと開けるさま。ひろびろとしたさま。

〔東は眺望〕——と開きて〔正岡子規「獺祭

重昂「日本風景論」

きき【暉暉】日光が照り輝くさま。

〔太陽特に——たるは〔井上勤「月世界旅行」〕

きぎ【巍巍・魏魏】高く大きいさま。

〔——と雲を凌ぐ高樓〔末広鉄腸「花間鶯」〕

きしよう【奇峭】山などがけわしくそびえ立っていること。転じて、人の性格などが鋭く厳しいこと。また、そのさま。

〔山姿〕——といふにはあらねど〔幸田露伴「易心後語」〕

〔彼も一種の——な性格である〔森鷗外「井

ぎぜん【巍然】高くそびえ立つさま。抜きん

〔五重〕——と聳えしさま〔幸田露伴「五重



塔〈

きつきつ【屹屹】 山の高くそびえ立つさま。

また、様子・態度が厳しいさま。屹然。

〔編輯記者の——として原稿に対する
机〔内田魯庵「社会百面相」

きぼう【危峰】 高くそびえて険しい峰。

〔此処より仰望せば——怪嶺簇々そろうととして聳立りりし〔志賀重昂「日本風景論」

きゆうさん【急霰】 にわか以降るはげしいあられ。また、その音。きゅうせん。

〔群衆の中に——の如き拍手起る〔谷崎

潤一郎「象」

きゆうしゅん【急峻】 傾斜が急で険しい・

こころさま。

〔——立てるが如き勾配〔田山花袋「日光

山S奥〕

きゆうたん【急湍】 流れの急な瀬。早瀬。急

灘たんぼ。

〔末は高原川の——になる〔小島烏水「日本北アルプス縦断記」

きようきよう【皎皎】 明るく光り輝くさま。

特に、太陽・月・雪などについて。こうこう。

〔——たる望月もち、黄金の船の如く〔森鷗外「即興詩人」

ぎようむ【曉霧】 明け方の霧。朝霧。

〔東天白み、——次第に晴るゝ頃〔徳富蘆花「寄生木」

きよくえい【旭影】 朝のぼる太陽。また、その光。

〔——三竿か、湖上に昇り〔織田純一郎「花柳春話」

くうかつ【空闊・空豁】 ひろびろとひら

けたさま。

〔熊本郊外の——にして美なるを驚嘆

す〔国木田独歩「欺かざるの記」

ぐえん【虞淵】 太陽の沈むところ。

〔若し日の既に——に没して後〔幸田露

伴努力論〕

くもあし【雲脚・雲足】 雨雲の低く垂れ

て見えるもの。

〔——の低たれた割には容易に雨も来ず〔山田美妙「戸隠山紀行」

くもて【蜘蛛手】 蜘蛛の足のよう四方八

方に出ていること。放射状に広がり、または組

み合わされている状態。

〔みんなの眺めてゐる空の一角に、と
きどき目のさめるやうな美しい光が
——にばあつと弾けては、又ばあつと消えてゆくのを見ながら〔堀辰雄「幼
年時代」

けいらい【軽雷】 かすかな雷鳴。

〔驟雨——あり〔永井荷風「断腸亭日乗」
けつりよう【浣寥】 雲ひとつなく、晴れわ
たっているさま。〔——たる春夜の真中まなに、和尚ははたと掌を拍うつ〔夏目漱石「草枕」けんけん【涓涓】 小川などの水の細く流れる
さま。ちよろちよろ。〔——たる細流跳とつても越えつべし〔徳

富蘆花「青蘆集」

けんこん【乾坤】 天と地。

〔暗やに慣れたる一同の眼には——一時
に明るむかと疑るる〔黒岩浪香「鉄仮面」
こうこう【紅雨】 赤い花の散るさまを雨にたと